

## 根を養えば枝葉は栄える…

先月は8月のお盆に合わせて、帰省された兄弟姉妹、あるいは子供や孫ちゃん達との再会、そしてご先祖様へのお墓参りと、何かと慌ただしい真夏の日々を過ごされたのではなからうかと思えます。

また今年には終戦60年という節目でもあり、戦争で戦死されたご家族の方達の慰霊法要も各地で盛大に営まれました。今を生かされている私達日本人は、戦前戦後を支えた私達のご先祖様への、畏敬の念を深めなければいけないあと、改めて感じ入りました。

毎月お寺の門前の黒板に掲載される言葉が反響を呼んでいます。先月の含蓄ある言葉を、皆さんは覚えていらつしやいますか？

### 『根（先祖）を養えば 枝葉末節（子孫）は栄える』というものでした。

これは今を生かされている我々子孫と、我々に命のバトンを渡して下さった御先祖様との密接な関係を「木」に譬えた言葉です。

中心に幹があつて、枝があつて、末端に葉っぱが一杯ついている。その根から幹、枝にかけて、ご先祖様の命だとすれば、我々が葉っぱの部分なのであります。

幹と繋がっていない葉っぱはどうなるのでしょうか？当然枯れてきます。

しかし木全体と繋がった葉っぱは活き活きとして輝いている。それは生きていくからです。

だから「ご先祖様の命と、我々の命とが、いつも1つに繋がっている」と感じる事が、とても大切なことなのです。その意味でお盆のお墓参りは、ご先祖様と我々子孫が1つであることを実感するための大きな行事の1つであります。

『全一統体』Ⅱ「全ての存在は目に見えない次元で繋がっている」と考えます。

本当はみんな結ばれているけれども、我々には別々バラバラの姿にしか見えていない。そこに人の世の様々な不幸が兆していると私は思います。

私達の眼は色々な物を見れるが、あまり遠いものや、近い過ぎるものは見られません。どんな視力の強い人でも、自分の眼は直接見れないし、千里の遠きを照らす灯台も、「灯台下暗し」その下は真つ暗がりな様に、他人のことは良く分かるが、自分のことは盲目同様になつてしまいます。

電車に乗る時に、脇から無理矢理割り込んできて席を取ろうとする人、飛行機の狭い通路で強引に前の人を追い越して先に出ようとするとする人、自分の手を汚さずに、汚れた仕事を社員に強制

する人。小さな事のようにだけけれど、そういう浅ましい事を繰り返している人は、決して幸せな人生を手には出来ないし、ましてや他人を幸せにすることは出来ないでしょう。その1つ1つが犯罪にならなくても、犯罪の元になつてしまいます。

何が恥ずかしいことなのか、その基準が狂ってしまった人は、他人の迷惑も顧みずに、その恥ずかしい行いを平気で繰り返していくものなのです。いま日本では凶悪犯罪が多発しているのも、こういう基準の狂った人々がつくり出した状況に他ならないと思います。

人間には他の動物と違って、与えられた環境や条件を変えていく力が唯一備わっており、自分達の手で作りました環境は、自分達の手で変えていく事が出来るからだ。その為に各々が他人を喜ばそうという気持ちを持ち、たとえ小さな事でもそれを実践していく事が肝心であります。

「平和」とは平らに和むと書きます。最初は「挨拶」です。挨拶すればお互いに和み合つて仲良くなる。親子でも兄弟でも「おはようございます」と挨拶できないやダメですね。

ニューヨーク大学病院の壁に書き残された『神の慮（おもんばかり）』という詩を紹介します。

【大きな事を為（な）し遂げるために、力を与えて欲しいと神仏に求めたのに、

謙虚さを学ぶようにと、弱さを授かった。より偉大なことが出来るようにと、健康を求めたのに、より良きことが出来るようにと、病弱を与えられた。

幸せになろうとして、富を求めたのに、賢明であるようにと、貧困を授かった。世の人々の称賛を得ようとして、成功を求めたのに、得意にならないようにと、失敗を授かった。人生を楽しもうと、たくさんものを求めたのに、むしろ人生を味わうようにと、シンプルな生活を与えられた。

求めたものを何一つとして与えられなかったが、願いは全て聞き届けられていた。私はあらゆる人の中で、もつとも豊かに祝福されていたのだ。

あれこれ悩むのでなく、その出来事の中に意味があり、自分は御先祖様から渡された命のバトンを、周囲の人達に生かされている事を知った時に、はじめて生きがい湧いてくる様です。

副住職 谷川 寛敬  
合掌



